

階級的労働運動再生の手引き

労大ハンドブックⅢ『やがてくる日だ』と『やがてくる日だ』と『やがてくる日だ』

第2回 東京ブロック

第一章 「三池と安保」総資本と総労働の闘い 「眠れる獅子」といわれ――

司会（佐久間）… 今月は、『やがてくる日に』の第一章です。島田さんの学習闘争がどう自分自身の成長を勝ち取り、労働運動に活かされたかを、皆さんと学習交流したいと思います。

島田さん、レポートお願いします。

労働運動に関わったきっかけ
ステッカー闘争で現認、異動

島田… 1979（昭和54）年3月16

日、18歳で京成電鉄（株）に入社しました。京成町屋駅に2年半勤務し、京成の表玄関と言われた京成上野駅に

異動しました。京成上野駅ではステッカー闘争が盛んで、一緒にステッカー貼っていたら職制に現認されて、次の異動で京成金町駅に行かされました。本部青年部長になって

異動時に、「職務第三分会の青年代表になってくれないか」との話があり、しぶしぶ受けてしまったのが運動のきっかけです。

その一年後、京成高砂駅に異動しました。第三分会の青年代表から職務総分会の総青年代表になり、その後は組

合本部の青年部長へと、青年代表を受けた時からルールが敷かれていたのではないかと思うような道筋でした。

青年部長になる前に、日本社会主義青年同盟（以下、社青同）私鉄班協の沖縄交流がありました。それに参加し、そこで正式に社青同に加盟しました。何が何だか分からないまま「時の流れに身を任せる」しかないような時期でした。

まなぶ友の会には、いつ入ったのかと聞かれれば、いつ入ったんだろうか、正確な記憶がありません。他の青年代表たちも全員ではありませんが、まな

◆みんなの学習講座



レポートを担当した島田実さん（左）

ぶ友の会の会員であり、社青同というのが当たり前の時代ではなかったのではないのでしょうか。

青年部長時には、私鉄総連青婦協幹事、私鉄関東地連青婦協副議長・事務局長、関東大手ブロッック幹事、千葉県私鉄青婦協事務局長、裏では社青同私鉄班協事務局長という忙しい日々を送っていました。

青年部長時の

「まなぶ」との関わり

京成電鉄労働組合（以下、京成労組）には月の半分居ればいい方で、私鉄総連、関東地連、他単産との交流（国労、全林野、自治労、専売公社）、私鉄班協と、専従でしたので時間にとらわれず、好き勝手に行動できたのは良かったです。

学習会は、まなぶ友の会関係で時間を取りやっていたのかと聞かれれば、青年部長時には学習会もまなぶ友の会も頭の中には浮かび上がってきませんでした。どちらかといえば社青同の東京・私鉄の会議等々に振り回されていたというのが現実です。

つらかった総評解体

一番つらかったことは、「総評」が解体され、「連合」になった時です。

連合東京の青年委員会に月一回出席することが大変でした。会議に参加すれば味方はおらず、1対10での闘いが待っており、自分の意見など通るはずもなく、言うことだけは言い、決まったことについては連合青年委員会の中では率先してやってきました。自分一人ではない、まなぶ友の会の仲間がいるからこそ、自分もいるのだという気持ちがあつたので乗り越えられたと思います。

総評が解散し連合に移行した時、連合東京の青年委員会が発足し月一回の会議がありました。

時間がない中でも、まなぶ友の会の関係で先輩たちから色々な情報を得ていたと思います。

8年経ち、職場に戻る

年齢的なこともあり青年部長をまっとうし職場へ戻る予定でした。だが、



当てが外れてその後も本部書記を2年、本部教宣担当を2年、計8年も組合本部に居続けてしまいました。

その後も「組合本部に残って欲しい」との話もありましたが、これ以上組合本部に居たら職場に戻れなくなるのは確実で、自分自身この先の事を考え元職場に戻ることにしました。元職場に戻るにしても8年もの月日が経ち職場の状況はすさまじい変化でした。

8年もいかなかったのに実習を2出番

だけで、いきなり本番でした。改札口で切符を切っていた業務から自動改札機が導入されて、更に成田空港アクセス北総線が新たに開通しており、「浦島太郎状態」で勤務となりました。よく対応できたというのが本音です。

学習の基本を理解できずに

私は、まなぶ友の会や新社会党の学習会に参加をしています。が、私自身「なぜ学習をするのか」「しなくてはいけないのか」という気持ちの方が大きく、青年部時代は勢いだけで行動し学習しても聞きかじりで、理屈がどうのこうのではなく「労働者の権利」と字面だけ覚え、学習することの基本を理解できずに行動していたと反省しています。

職場復帰し、働いてみると「労働者は社会の主人公」ということが実感できました。気持ちの変化なのか、学習

し、実践し、総括する。また学習し、実践し、総括する。そして反省、反省と、反省はかりの日々でしたが、学んだことを「自分の言葉で、仲間に伝える」ことができるようにと学んでいるのですが、自分の言葉に変えていくにはそれなりに内容を理解していなければ自分の言葉にしていくことは難しいです。「学習は面白い」自分との闘いでもあると思います。

司会（佐久間）：ありがとうございまして。島田さんの入社から現在までの歩みを報告していただきました。何か質問ありますか。

田口：京成の闘いで、よく京成上野駅のステッカー闘争のことを聞きますが、あれは何が問題だったのですか。

島田：京成労組が闘い取ってきた人事協議権に対する制約を加える提案がされて、賃金とバーターでの合理化攻撃でした。

田口：結果はどうなったんですか。

◆みんなの学習講座



93春闘での横断幕作成 各駅の改札口に張り出した

島田：それまでの人事（昇給・昇格異動）協議は、「労使合意」がないと発令されませんでした。だから、労働組合の意向も反映されていました。

それを、「異動は14日間、昇給・昇格は10日間と協議期間を決められ

協議が整わなければ、会社案で実施する」という内容でした。残念ながら、人事協議権に制約ができました。福田：人事協議権の制約になって、職場に変化は？

島田：ハンドブック5ページにも書いてあるように、三池炭鉱労働組合を結成当初は「三井さんのおかげ」で職につけた、文句を言ったら罰があたるというように「眠れる獅子」と言われる状態でしたとあります。

京成は人事協議権の制約で、やっぱり「会社あつての労働者」という意識が芽生えてきました。

今までは、労使合意で何も怖いものがなかったが、これからは一人ずつに鉄砲が打たれるようになりました。京成も「会社あつての労働者」とやられました。やっぱりここを克服しないと闘いにならないです。

労働者階級の一員として使命を果たしていくことに、向坂先生が言われて

いた指導と塚元さん、灰原さんの「一生たたかい続け、学び続ける」という構えと具体的な指導があつたということとは、非常に自分としても大事だと思えました。

どんな学習会？

古賀：職場復帰し、「労働者は社会の主人公」ということを学んだということですが、どんな学習会をやられたんですか？

島田：『経済学入門』を使い、社会の仕組みをきちっと捉える学習をやってきました。

古賀：だからか、私も『経済学入門』を学んできたけど、なかなか自分の言葉にするのが難しいね。

渡部：島田さんの学習のやり方は、どのようなものでしたか？

島田：先輩たちと討論しながら、社会のしくみを学んできたのだと思います

す。

磯部：島田さんは、どこでそれに気づいたの？

島田：京成労組は、毎年のようにストライキを行い闘ってきました。『経済学入門』に書かれていたように、労働者が働かなければ会社に一円も入らないことを、ストライキを通じて学ぶことができました。その学習会で、社会のしくみと自分たちの立場がわかりました。

高井：ああそうですか。私も宮団地下鉄の乗務員だったので、毎年のストライキについては経験してきています。島田さんの言うことは、自分の経験からも理解できますね。

駅務分会の教宣部に関わる

司会（佐久間）：職場に戻った後の島田さんの活動は、どう変化したんですか？

島田：職場に戻る直前は、本部の書記

として教宣部を担ってきました。教宣部として特に意識したことは、職場組合員の声を拾って歩く、声を大事にする新聞づくりに取り組んできました。

教宣部長から徹底して「職場廻りをして来い」と言われました。「記事は、頭でなくて足で書け」と教わりました。磯部：そうは言うけど簡単じゃないね。

島田：教宣部長に、夜働いている人のところに行つて来いと言われました。

古賀：駅に戻つてからの現在までの活動はどうなんですか？

島田：駅務分会の教宣活動で、「日刊紙」の発行に携わりました。

渡部：京成の『日刊各駅停車』、聞いたことがありますね。どんな取り組みだったんですか？

80人が関わり「日刊紙」発行

島田：組合員300人のうち教宣担当

者は最大時80人が関わり、月曜日から土曜日までのA班・B班の12班と、電車支部機関紙『戦線』A班・B班の14班体制で発行してきました。

芳賀：労働組合本部、支部・分会の新聞や機関紙発行については、組合役員が担当するところがほとんどですね。上部からのお知らせや提起が多いと思います。

1970年代から80年代の会社側からの合理化攻撃を総括した諸先輩たちの指導があり、一部の役員・担当者が作る機関紙ではなく、職場組合員が主体的に労働運動に携わる取り組みとして改善されてきました。それは、組合役員以外の担当者を少しずつ増やして、「週刊紙」から「月・水・金」の隔日発行、さらに『日刊各駅停車』へと発展し、職場の諸問題が中心の記事へと変化し、駅務分会組合員の財産となりました。

星：自分も『日刊各駅停車』の班長を

◆みんなの学習講座



京成労働会館（組合本部）ホールで
『日刊各駅停車』6000号記念集会 2003年5月16日

やりました。活動の柱は新聞発行はもちろんですが、交流と団結作りが活動の中心でした。具体的に言うとな新聞発行日に電車支部に組合員が集まり、

職場で起きたことを突き合わせしながら新聞に記事をまとめました。

団結作りでは新聞発行の後に食事を開いたり、班員の団結旅行を計画し、様々な要求をとりまとめました。

それが労働組合に対する組合員の意識を高めて、自分のものとして意識されるようになりました。それが駅務分会での力になったと思います。

槍崎・島田さん、今どこの労働組合も闘いがなくなってきたと思うけど、現状はどうなっていますか？

島田・06年、京成労組本部は私たちに対し「本部指導に従わない」と査問委員会を開き、組合員権利停止と組合員から排除しました。教宣部はありますが、俺たちが作ってきた「日刊紙」活動は無くなりました。

それで私たちは、職場の仲間の声を大切にしながら、「京成労組の民主主義を守る会」の同人誌『月刊道しるべ』を作り、仲間に手配りしながら、私た

ちの主張を訴え議論しながら、仲間から学び合う運動を取り組んでいます。

本日のまとめ

高井・今日の島田さんの問題提起は、多くの仲間が、職場を離れた現状の中で、私たちが今後どういった活動に取り組むのか、その方向について提起がされていたように思います。

司会（佐久間）・今日は、ありがとうございます。島田さんの学習闘争が自分の成長をどう勝ち取ったのか、そのことを中心に皆さんと交流討論ができました。

次回は、第二章 前史は囚人労働
第三章 眠れる獅子の目覚めです。

自分自身の成長が労働組合の組織強化にどう活かされたのか、元国労組合員の千葉愛一郎さんから提起してもらって皆さんと交流討論をしたいと思えます。